

史料紹介

綱光公記 — 寛正五年曆記(二)・寛正五年十一月二二別記 —

遠須 桃田
藤 中田 崎
珠 牧 奈 有
紀 保 子 一 郎

『東京大学史料編纂所紀要』二〇号・二一号・二二号・二三号所載の「綱光公記 文安三年・四年曆記」「綱光公記 享徳三年曆記」「綱光公記 寛正三年曆記(一)」「綱光公記 寛正三年曆記(二)・寛正五年曆記(一)」に続き、本稿では広橋綱光の寛正五年(一四六四)曆記九月記〜十二月記、同一一月二二別記を翻刻・紹介する。本記の性格については二〇号を参照していただきたい。

寛正五年曆記は国立歴史民俗博物館に所蔵されている(広橋家旧蔵記録文書典籍類H六三―八三九)。間明二行の同年の書写具注曆一卷に記され、数カ所の貼り継ぎが見える。貼継紙には書状等の紙背が使用されている。題簽には「済」綱光公曆記(自寛正五年六月十八日至十二月廿九日 自筆本/首間欠(六月十八日首以前、及自七月一日至十日欠)壺巻 『綴合改めたる通り』)とある。

寛正五年時の綱光は三四歳、正三位権中納言となつてゐる。私的な面では一〇月二七日に、七歳になつた子息茶々丸が安居院に入室し、一月四日には男子が誕生した。

將軍は足利義政。天皇は後花園天皇から、同年七月に第一皇子成仁親

王(後土御門天皇)に譲位し、一〇月一日後花園に院号が奉られた。本記にも新帝の御読書始、御笙始の記事が見える(九月一七日・二七日条)。退位した後花園院の新御所の庭は、足利義政の差配でしつらえられた(九月二二日・一〇月一日・二日条など)。この時、広橋邸からも庭石を献上したようである(十一月一八日条)。一〇月二二日には、後土御門天皇に皇子(のちの後柏原天皇)が誕生した。一月には院三席御会が行われる。これに先立って義政が、永享年中に義教が献上した禁裏御物の曜変建蓋拝見を望んだ記事が見える。しかしこの時、建蓋は質物として転々としていたようであり、そのやりとりも興味深い。

將軍家では、十一月二八日に義政に対して准三后宣下が行われた。二月二日には、浄土寺に入つていた弟義尋が還俗し、義政の養子として義視と名乗つた。同時に従五位下左馬頭に叙任される。二月一五日には、懸案となつていた石清水八幡宮放生会が行われ、義政が参行した。またこの曆記に対応するものとして、寛正五年一月二八日条足利義政准三后宣下、一二月二日・五日条足利義視還俗関係の別記が現存する。今回は、こちらもあわせて翻刻紹介することとした。この別記も現在国

立歴史民俗博物館に所蔵されている（広橋家旧蔵記録文書典籍類目六三―六七二）。文書の反古八枚を貼り継いでその裏に記されている。題簽には「綱光公記（寛正五年十一月廿八日・同十二月二日・同五日 自筆本／完） 巻 綴合もとのま、』とあり、一紙目の端裏には「十一月廿八日慈照院殿准后宣下事、十二月二日大智院御還俗事」と記されている。後世の整理であろう。なお一二月五日条の末尾に書状二紙が貼りつがれているが、これは寛正五年のものではなく、宝徳二年（一四五〇）の万里小路時房書状を誤って継いだと推測される。そのため今回は省略した。宝徳二年七月五日に足利義政の直衣始があり、綱光が奉行した。その準備に関わる書状であろう。なお、この儀の詳細については、桃崎『中世京都の空間構造と礼節体系』（思文閣出版、二〇一〇年）第三章を参照されたい。

別記には儀礼の細かい作法や、参礼の様子が詳述されている。また義視の元服に伴い、鎌倉公方足利政知が左兵衛督に任じられた。足利満詮の例によるとするが、政知の任官日はこれまで知られておらず、この点でも興味深い。ただしこの別記は「次」で文章が切れていたり、不自然な空行などが存在する。おそらくまだ完成したのではなく、のちに増補する予定だったのであろう。

末尾になるが調査・翻刻を御許可下さった国立歴史民俗博物館に深謝申し上げます。

なお本稿は「室町後期・織豊期古記録の史料学的研究による政治・制度史再構築の試み」（科研費・基盤研究（C） 研究代表（遠藤珠紀）の研究成果の一部である。

【凡例】

- ・翻刻に当たっては、具注暦部分は略し、日付と干支のみ、ゴシック体で示した。
- ・具注暦に貼り継ぎがなされている場合は、「」で括って示した。貼紙、別記の紙継ぎは「」で示した。
- ・文字はおおむね現時通用の字体に改め、改行は原則として追い込みとした。傍書・挿入箇所も適宜本文中に追い込みとした。
- ・本文には読点および並列点を適宜加えた。
- ・尊敬を表す闕字は適宜存した。
- ・欠損の箇所はおよその字数を計って□または□で示した。抹消された文字は左傍に、を付し、判読不能の塗抹文字は、およその字数を計って■または■とした。判読不能の文字は☒で示した。
- ・本文中で校訂により改められるべき文字や加えられるべき文字は「」、人名注など参考のためのものは（ ）に入れ傍に記した。なお人名注は現在通用する家名および名を用い、各月の初出時に示した（例えば室町殿は足利三春あるいは義成でなく義政とした）。入道した者については、まず法名を示し、続いて俗名を示した。
- ・その他、適宜○を付して注記を示した。

九月大

一日辛亥、

晴、早旦奉拜尊神等之後、參賀(足利義政)室町殿、構見參、珍重(少將局)、入夜參

内裏并 仙洞、祝着(高倉)、

抑自 室町殿御道服(紫)被下之、御使御末匠奧阿弥也、云眉目云過分、祝

着只忘左右、万幸(金)、黑太刀一腰与之、即參 御所、所畏申入也、御

太刀進上之、

三日癸丑、

晴、自今日於瑞雲院始作善、至九日、慶福院卅三廻故也(廣橋春龍丸、綱光父兼郷ノ男)

四日甲寅、

雨下、三条大納言以下十余人、依所望、淨菩提寺平家聽聞、先於瑞雲院

行時者也、予早旦詣寺之處、有召、忿參 御所、八幡御社參事也、又御

水精持參 仙洞被為御使又婦參、叡感旨所申入也、其後面々中食、頃

之講後堂平家、了有酒、入夜分散、三大(高倉)・大炊大(廣橋)・永繼朝臣(大炊御門信重)・兼顯等為

乘車、不無其興者也、

五日乙卯、

晴、三河守景富、今日前髮、賜盃、又有時、是慶福院作善也、昼程有召、

忿參 御所之處、八幡御社參事也、所詮神祇方儀者、不本妻妊婦不憚之

間、任本儀可有御參詣也、先御代御憚者雖為勿論、及此御沙汰、尤殊勝

也、依此事兩度參 御所了、

八日戊午、

晴、早旦詣瑞雲院、今日行施餓鬼一会、明日慶福院卅三廻之作善也、如

形所取行也、前七個日漸写経等在之、点心以後有召、忿參 御所、八幡

御社參延引事也、是自八幡宮司(橋)無本妻・妾之差別、相憚社例由堅

申問、猶可被任社例由被仰出者也、是又勿論也仰也、凡此段神祇官覺語

以後歸宅、

九日己未、

晴、菊節幸甚(資益王)、早旦參賀 室町殿、構見參、祝着(下部)、重陽平座散

狀、付申次披露之、入夜參 内、平座俊顯奉行、上卿中院大納言、位次

公卿不參、少納言長清朝臣(東坊城)、弁俊顯也、天酌以後參 院、同前、祝着

十日庚申、

晴、明且於春日社大般若転説之祈禱行之、修南院被奉行也、四季祈禱也、

併奉仰慈悲万行、被神助者也、自今夜始神事、明日遙拜故也、

十一日辛酉、

晴、例幣、上卿小倉中納言、弁(實右)廣光、雖為万機旬以前、以永仁等御例、南

殿出御云々、脂燭兼頭被仰問、所召進也、衛府為警固中間、壺・老懸等

如例、御釵頭中將、脂燭政(松木宗綱)為朝臣(下冷泉)・為(山科)廣・言国等也、但兼顯虫瓮之間、

俄不參、依不御事闕也、頭弁不參之間、頭中將候御裾之間、御釵政為朝

臣云々、先上卿參陣、宣命奏聞之後、參神祇官云々、予 院宿直、

十二日壬戌、

晴、早旦參 御所、山上庄又半濟事、多年不返付之處、嚴密被仰付、以

清和泉守、昨夜被遵行召下、畏申、進上御大刀(實秀)者也、次向藤中納言入

道亭、日野大納言以下会合也、及夜景分散、舞女在座、不無其興者也、

十三日癸亥、

晴、明月也、依召參 御所、

今日東大寺転害会也、広光為勅使下向云々、

抑自南都祈禱卷数到来、祝着(廣橋兼善)、

十四日甲子、
晴、祖父入道殿御月忌如例、於瑞雲院如形致其沙汰者也、前七日儀如例

年、抑自今日被行御修法、（道賢）聖准后文殊八字法也、

十五日乙丑、

晴、蝕御祈誰人哉、可尋記、放生会可為今日之処、依神訴又延引、為之如何、可恐、

十六日丙寅、

晴、早旦參 御所、御修法修中御加持也、無御出間、申出御撫物者也、
 昼程又有召、念參仕之処、有 仙洞被申御物共、可被進也、可持參云々、
 畏承由申入了、目六如此、

十七日丁卯、

晴、依番參 内、今夜被行開闢・解陣、上卿洞院大納言・「（挿入紙）頭弁宜胤朝臣奉行之、少納言（西坊城）顯長朝臣、大内記不參、少内記中原、中務輔、等也、次第如例、番頭一盞被張行之間、不伺見、無念、次被行解陣也、右近府政為朝臣・橘以量等也、帶衛府具了、抑昼以後有御誦書始、

清少納言（清原）宗賢朝臣（清原業忠）參仕者也、是常忠入道永享御例也、常宗以來及三代、可謂高運也、近代大略孝經云々、然已被書遊給間、尚書申之者也、

御學問所東面卷上御簾、小文上敷御茵、御前置御文台、御上置御本、（白仙洞被進之、不然之御字指又被置之、次出御、予候御前、橘以量召宗賢朝臣、時、令持參事為先例、御引直衣）次自殿上經御殿簀子、於長押下伺御目、（持）次着円座、一揖、更參御前、

安座、自懷中取出一卷、置御文台上、誦申之、（呂）次取本、卷也懷中之、（主）次主上令披置御本於御文台上給、次宗賢朝臣以笏誦申之、三反、也上同令誦、給之後、宗賢朝臣起座、歸着円座、掛退出、今日儀無為珍重之由、

為 勅使可參申院之由、被仰下之間、勅言之通申入之、御誦」書始事、無為、誠珍重之由、承御返事、歸參 御所院仰之通申入之、永享度故万里小路内府令申沙汰云々、不及職事沙汰問、予相尋風記、所申沙汰也、兼日奉書遺宗賢朝臣了、常忠入道永享記注進之間、備 觀覽者也、

十八日戊辰、

晴、昨日御誦書始御礼、自 室町殿御馬（栗）・御釵（白）被進 内裏、予為御使、御祝着之由、蒙 勅言、歸參 御所、以申次申入也、（永享七年八月二十五日）永享度御筥始被進外、無所見、以准拋猶被進之、珍重、御馬予可預置由申入間、不可有子細候也、

十九日己巳、

晴、（挿入紙）「入晚、自 院有召、着狩衣、念參仕之処、被仰下云、伏見殿御庭、土用以後此御所可被引渡之間、其以前被御覽度由、有 勅言、密々御幸事、何子細候哉、但褻御幸以前事、聊可被廻 叡慮歟由申入之処、御車など御用意之由不及御用意、月出者臣下少々被召具、陣中御歴覽之次、可有臨幸上者、

条有何子細哉、旧院御代、（後小松院）然然有其沙汰事、旁不苦歟由、被思食由被仰下間、尤儀之由申入間、即近臣夕方有御用事、各可祇候由、可仰遣由有 勅定、仍以廻文觸之、予先參 室町殿、御修法始行以後退出、即又

歸參 院、時雨、或晴、清月已昇、頃分令着御狩衣、（白櫻）御座、御釵（庭田雅行）源宰相中將、菅原在數持御茵、人々自身持打刀、自中門御出、一条東行、

至伏見殿東門、竹園自元庭上御參会、御裏無、頭中將献之、御庭以下御所中悉御歴覽之後、於東面御座帶有一献、及數献、有御樂、上皇御琴、竹園御比（琵琶）、四辻中納言笛也、又有御短尺、御製、竹園又被詠進之、（申）大飲之余、及乱舞、又於王玉有一献、及天明程、有還幸、併千歲一遇秋也、珍重、竹園同還幸、有御供奉、公私酩酊、一身平臥、為之如何、

抑此殿并御庭風情不所及言詞、室町殿御沙汰神妙之景也、西芳寺被写了、（百野重子）勝智院殿御後、被進伏見殿者也、為後不審聊注之、

廿日庚午、

晴、室町殿御修法結願、御撫物可申次之処、依余醉不參、以青侍内々

付申次申也、不敵々々、自伏見殿以源宰相中将御馬・御劔被進 院云々、
廿二日壬申、

晴、依番参 内院今日御庭絵程被仰付之、執権卿祇候、千秋刑部少輔為奉
行、於番衆所有盃酒、被出 天酒故也、數盃、頃之沈醉、言語道斷間、
經繼相博、退出、

廿三日癸酉、
晴、北面始延引云々、百日番御短尺、昨日依沈醉不詠進間、参 院、此
子細申入之、後書入御短尺者也、寄草恋也、早且有召、扶余醉、参 室
町殿、御院参之時、可被進御服事也、褻御幸時、御染御服間、可為御練
貫者、可然由申入了、

廿四日甲戌、
晴、地藏講如例、室町殿白等持寺壬生地蔵御参詣云々、依開帳也、
廿五日乙亥、

晴、瑞雲院殿御月忌如例、
抑今度神宮宮内御齋礼之時、室町殿御代官詣、与神人喧嘩出来、瑞籬内并
神殿血流、令穢間、無御齋会、於外宮者無為云々、此事自神代、未無其
例、希代珍事也、可恐々々、仍此題目召仁奏、御糺明事、被仰頭人奉行
畢、

廿六日丙子、
晴、住吉神主国昭律守 禁裏・仙洞参賀、予申次之、於内裏者御卷数并二千
疋進上之、菅原在数取之付予、付勾当内侍奏聞之、仙洞儀同之、但千疋
也、不昇殿間、於地下仰 勅言旨了、参 内、束帶、於仙洞ハ衣冠下括
也、是先例云々、各代始御礼也、

廿七日丁丑、
晴、依番参 内、今日御筥御稽固始也、殊更以日次有御沙汰云々、依衆
奉行四辻中納言申沙汰云々、縁秋朝臣祇候也、出御黒戸東面御簾中也、

入夜掃参、今夜別殿 行幸也、御讓位以後初度也、頭弁奉行、依方角吉
方典侍御局臨幸、兼日仙洞仰也、兼頭依仰脂燭参勤也、仍着束帶、
隨身一人・小雑色一人等也、職事皆参、頭中将宗朝朝臣候御劔、脂燭殿
上人雅康・政為等朝臣、言国・為親、六位二人、以上七人也、可謂濟々、
尤珍重、七献之後還幸、三献 天酌也、職事被召御前、被下 天酌
了、是予令申沙汰了、於職事者各別事也、龍鬢侍郎勿論之故也、四辻中
納言以下近臣少々祇候、公私初度所祝着也、

廿八日戊寅、
晴、弁才供養如例、依召参 室町殿、御大鉢鉢被新調御物被進 内裏、
可持参由、被仰下間、畏承由申入、付勾当内侍奏聞之、 叡感旨掃参申
入了、退出、是先度御所望故也、

卅日庚辰、
晴、早且参 室町殿、御卷数持参御所、如每月、入御之後開山基御出、
御車以下事、兼日相触之、有別記、直向日野亭、雑談、有朝飯、其後並
相同道、詣鹿苑寺、殿堂等歴覽、催旧懐、紅葉照水上青松映池辺、残秋之
幽歌等以断腸者也、頃之掃路之次、千本之院中有一盞張行、教盃酪酌、
及夕陽面々分散、予等馬也、藤宰相等有此席、

十月小
一日辛巳、
晴、早且相扶余醉、参賀 室町殿 構見参、幸甚、御台御方御盃如
例、依召参 院、御庭事也、入夜改着衣冠、参 内、天酌所祝着也、依
伯二位相博宿直、平座、日野大納言、参木不参、少納言又不参、弁氏長、
即奉行職事也、平座了有尊号詔書復奏、上卿兼行、予詔書於禁省加署者
也、遲々持来、是何事哉、雖然召進御所了、両条也、於復 奏者頭弁雖為
奉行、当日事氏長与奪云々、

二日壬午、

入夜掃参、今夜別殿 行幸也、御讓位以後初度也、頭弁奉行、依方角吉
方典侍御局臨幸、兼日仙洞仰也、兼頭依仰脂燭参勤也、仍着束帶、
隨身一人・小雑色一人等也、職事皆参、頭中将宗朝朝臣候御劔、脂燭殿
上人雅康・政為等朝臣、言国・為親、六位二人、以上七人也、可謂濟々、
尤珍重、七献之後還幸、三献 天酌也、職事被召御前、被下 天酌
了、是予令申沙汰了、於職事者各別事也、龍鬢侍郎勿論之故也、四辻中
納言以下近臣少々祇候、公私初度所祝着也、

廿八日戊寅、
晴、弁才供養如例、依召参 室町殿、御大鉢被新調御物被進 内裏、
可持参由、被仰下間、畏承由申入、付勾当内侍奏聞之、 叡感旨掃参申
入了、退出、是先度御所望故也、

晴、仙洞御庭、自今日被始行、依吉日被立始石云々、善阿弥立之、千秋
(勝季)刑部少輔依 室町殿仰奉行之、諸大名廻(ツキマ)也、今日管領可為三日
云々、一个国・二个国者為二日云々、堂上奉行被定六人了、万里小路前
大納言・按察中納言・源宰相中將・頭中將宗綱朝臣・顯長・長清等朝臣、
每日兩人充祇候云々、執權卿申沙汰之、予御免所畏申也、依番祇候、着
到歌一首詠進之、

三日癸未、

晴、入夜參 御所、自 仙洞女房奉書(二)通持參之、付申次伊勢備前守、
是丹生社申松原庄事、并勸修寺宮与十住心院相論事也、於松原庄者被返
付本主可然、在所可申入由、被仰神主了、勸修寺宮事、左衛門大夫可
被尋由、可申付也、畏承由申入之、將又来月褻御幸御供奉御隨身付花事
申春日殿了、
(撰津滿親女)

四日甲申、

雨下、自曉晴、微明 室町殿高尾渡御、有御連哥云々、太閤、関白并聖護
(義賢)院・三寶院兩准后、実相院僧正、御局、帥卿、日野大納言、飛鳥井前中納
言等參会云々、管領・一色・山名・京極等、同御連歌衆云々、此外伊勢守
以下年始之御連歌衆祇候云々、追可尋記、執筆杉原云々、役送永繼・雅康・
長清等朝臣、昨日伊勢守相触之、每事永享例也云々、(永享六年一〇月一〇日)室町殿御直衣間、
帥卿以下同前云々、於撰家者小直衣敷、抑理性院・二尊院不入来、
(善空惠應)

五日乙酉、

晴、自今日經堂万部經始行、 室町殿御聽聞云々、

七日丁亥、

晴、梅尾開帳為御拜見、御台御方御出云々、三个日為御神事、御庵同令
參給、申刻有祝、其後參 内、招匂当内侍御祝餅申出、先參御局、御祝
祝着、又參 仙洞、同申出之、直參 室町殿、少々參集程也、秉燭
之後御出座、先武家面々、次帥卿以下次第參 御前者也、予如去年 内

裏・仙洞御祝物持參之、先禁裏進上之、次 仙洞也、次拜領之退、付
申次御餅殘進女中、頃之人々參小侍所、春日殿被出合、各々拜領退出、
抑兼顯今日初參仕間、進御太刀(金)、付申次者也、馬事今朝付日野大納言披
露之、千秋万代之儀所祝着也、將又三位殿(子)、(孫)室町殿御祝物雖被□御
斟酌、此事以春日殿被仰談了、此外女中如年々被出云々、
八日戊子、

晴、安居院入来、被一宿、為雜談也、馬自他乘之、依月明也、有粥、

九日己丑、

晴、安居院及晚被帰了、入夜南都尊勝院入来、寺務事也、
十二日壬辰、
(廣橋兼繼)晴、御月忌如例、執權卿依音信令同車、万部經聽聞、於車中有一盞、次
於千本尺迦堂有夕飯等、大飲、及夜景帰寿域、松波三郎兵衛送馬間、乘
用帰宅、青侍等不来迎間、堅加切勘了、
(折檻)

十三日癸巳、

晴、今日内野經停止云々、御布施違乱云々、
十四日甲午、
(廣橋兼宣)晴、祖父入道殿御月忌如例、
十五日乙未、
雨下、室町殿鹿苑寺渡御、每年儀也、万部經今日結願也、
十六日丙申、

晴、万部誦經有之云々、

廿日庚子、

晴、自今日供花結中、每年七七日雖致其沙汰、当年御讓位以下条々大儀
申沙汰依計会、自然延引了、是尊神之御本地以下供花也、又三頌一字三
礼令書写者也、連々成其功、併慈悲万行神助奉仰者也、
抑旧院聖忌也、有御受戒云々、精進念仏、智恩院上人參 内・院、代始

御礼也、小原問答講一冊被進院者也、

廿一日辛丑、

晴、今朝禁裏若宮御誕生、也母儀源大納言入道息女、此一兩年御寵愛也、

度々姫宮御誕生、此近衛局者大芝殿上臈、然依叡慮庭田宿所被召

置者也、事儀先以珍重即參内申入者也大慶也、早旦參 御所、若宮御誕

生之由悅入之也、御馬・御太刀可被進敷、但先例御不審、忿引勘可申入

云々、鹿苑院殿以來家記、雖引勘無所見、常忠入道以下同前也、婦參申

入之処、猶可被進、為御使可持參、直被仰下之間、畏承由申入、直參 内、

御馬・御銀白、付匂当内侍奏聞之、勅言之通婦參申入者也、參 院、

珍重之由、申入之、禁裏同賀申入了、入夜參 内、一猷近臣人々申沙

汰間、予御人数相加者也、及乱舞、大飲御酒也、珍重、

廿二日壬寅、

晴、

廿五日乙巳、

晴、東北院・清和院等參詣、心静祈念、

廿六日丙午、

晴、風氣相侵、令平臥者也、

廿七日丁未、

晴、御本地供花今日修之、所願成就勿論、

廿八日戊申、

晴、今日 室町殿撰津宿所渡御、御台御方同令渡給、仍千疋并樽等遣了、

自女中同被遣之、予今朝罷向見訪了、御庵御成令參給、時宜快然云々、

有猿樂、

弁才供養如例、

廿九日己酉、

晴、早旦參 御所、御卷数持參御前如例、

抑囉變御建蓋永享行幸時被進云々、可有御拜見之由、可申 院云々、千

阿弥承也、仍即申入之処、三条入道内府御質物申請了、即被仰遣之処、

只今難返上、其故ハ齋藤備中入道代官年貢未進間、先年申出了、然不致

沙汰間、于今無沙汰迷惑至也、堅加催促可返上也、其間事者可被計下

云々、此旨千阿弥申遣了、

十一月大

一日庚戌、

晴、早旦奉拜尊神等之後、參賀 室町殿、構見參、珍重、人々同之、

院三席御会可為来月五日云々、執權卿伝 奏也、今度被用至德之例者也、

是鹿苑院殿御參故也、於応永者勝定院殿御不參間、如然、被巡 叡慮、

仍序者事、室町殿御辭退、再三雖為御辭退、重被申了、予任兩度例和

哥御人数也、

二日辛亥、

晴、及晚聊時雨、依番參 仙洞、御庭今日奉行冬房卿・長清朝臣也、自

室町殿有召云々、仍退出、改着直垂參任之処、内裏御湯殿上御棚出来

也、可持參由被仰下之間、畏承由申之、直參 室町殿招匂当内侍取進之、

叡慮之通婦參申入之、千阿弥奉行也、仍被 勅言旨者也、將又囉變御建

蓋事、重有御沙汰、即申入 院者也、執權卿參 院、予又婦參、是来九

日猿樂、御座敷為拜見也、御幸以下条々自他談合者也、

今日為女中祈祷七觀音七人詣參詣者也、以上十五人二七人分也、所願成

就勿論、

三日壬子、

雨下、入夜晴、

四日癸丑、

晴、今曉寅刻男子誕生、平安也、所祝着也、

五日甲寅、

雨下、終日祇候 院、御幸以下条々事也、
六日乙卯、

晴、美物兩種鷹一、榮進、進 御所、明日御幸儀也、公武人々如先々進上故也、
抑冬俊卿去一日他界云々、腹痛云々、故兼俊入道子也、竹屋、竹屋、廣相仲光、廣相父入道殿孫
子也、尤以不便、今日經代百疋遣之、
七日丙辰、

晴、今日褻御幸也、委細有別記、

八日丁巳、

晴、未刻計參賀 室町殿、昨日御幸御礼也、公武人々進上御太刀如例、
撰家以下同之、諸門跡又同前、

九日戊午、

晴、室町殿已終程御 院參、於別当局御小直衣着御、是今日猿樂申御
沙汰故也、於寢殿為御座敷、委細有別記、

十日己未、

晴、早旦參 御所、御幸破子拝領御礼也、不及進御太刀、拝領人々同之、
昨日依御余醉無御出之間、予書散狀付申次者也、

十一日庚申、

晴、飯尾大和守兩度御使入來、是執柄可被進御書、御書礼事也、將又御
元連名字下御判、并御上書御名字事可然由申入了、賀州御領不入事云々、自
院美物兩種被下之、祝着畏存者也、是自武家被進之間、被分下云々、
了庵明了御庵御入者也、

十二日辛酉、

雨下、御月忌如例、
廣橋兼郷

十四日癸未、

晴、祖父入道殿御月忌如例、
廣橋兼宣

十五日甲子、

雨下、今日畠山尾張守政長補管領職、即出仕始也、評定始、御沙汰始同日
云々、就評定始御礼人々可進御大刀也、可存知由於室町殿被告之間、
申半刻參賀 御所、御沙汰始等事終後、朝日衆公武人々進御太刀、御対
面所也、于時酉刻計也、
抑自 仙洞綾御服一重被下之、今度御幸御引出物内也、朝恩至、祝着畏
入者也、

十六日乙丑、

晴、及晚藤中納言入道等令同道向管領宿所、遣黑太刀、表礼計也、
常慶、高倉永豊

十七日丙寅、

寒嵐入骨、自夜雪下、可謂嚴霜程也、參 院、条々被仰下者也、

十八日丁卯、

晴、愚砌石共進上院之後、此四五日直庭、今日終其功者也、大石彼是十、
先年又月輪故大納言十、就申請遣之間、以上廿分進上了、為後聊記之、
及晚參 院、条々被仰下事等有之、飛鳥井前中納言參会、御点普請奉行
云々、
家輔
雅親

廿五日甲戌、

晴、向前菅大納言亭、是詩会也、來月五日三席御会參之間、為自他習礼、
東坊城益長即有披講儀、講師頭弁也、有召參 室町殿、是准后 宣下并御還俗等申
沙汰事也、直又罷向者也、數反講之、序又同前、是古序也、日野前大納
言等有此席、數献盃酌之後歸家、竹葉一双令隨身了、

廿七日丙子、

晴、今日茶々丸安居院坊入室、生年七歲也□□□一宿□後、先可帰宅分
了庵兼約候、善養入來、力者等同還、賜勸三献、殊更各賜引出物、水干白、
安居院善養房大口等也、殊更五百疋折紙隨身之、併万代之儀也、祝着、慈母以下
豐子女王御出、雖為産穢中、於女中有來榮、珍重、景敦等為共、
藤堂

廿八日丁丑、

晴、今日 室町殿左大臣殿准三后 宣下也、関白殿被執申云々、仍可申沙汰(二条持通)由被仰下間、申入 院者也、奉行職事頭弁宣胤朝臣、是為永徳例、上卿(永徳三年六月二六日)件度都護資(裏松)弘卿間、今度又被仰都護卿者也、(甘露寺親長)卅日己卯、(藤)

晴、早旦參 室町殿、御卷数持參 御前、如每月、(鳥丸盤光)安居院入来、山法師等同道、来乘張行、所祝着也、此砌右大弁宰相・雅康朝臣等入来、勸来乘、及夜景者也、頃之人々分散、

十二月小

一日庚辰、(足利義政)晴、早旦參賀 室町殿、構見參、珍重、如年々、有一献者也、

二日辛巳、(義尊)晴、今日淨土寺新門主室町殿御弟、就小河殿御例有御還俗之儀、奉号今出(正親町三条実雅)河殿、三条入道内府以養育御儀、被成彼亭於御所者也、日野大納言・(勝光)伊勢守兩人每事申沙汰之、於御昇進以下者予所申沙汰也、御名字義規、(東坊城)前菅大納言益長卿勘進之、

五日甲申、晴、自晚景雪下、積寸、豐年之嘉瑞也、

七日丙戌、晴、早旦參賀 室町殿、三席御会詩哥御參始、序被献之、為御礼公武人々各進上御釵之間、所早參也、東面儀事了、自西大閣以下參賀給、申次(一条兼長)永繼朝臣也、御釵同前也、次今出河殿御參者也、入夜參 院、御雪消、近臣人々申沙汰之、天酌以後退出、抑沙金一兩拝領、是今度御幸時御支配云々、重々 勅祿、所祝着畏申也、

九日戊子、晴、為 内宮山口祭料洛中洛外被懸地口者也、段錢不事行故云々、仍任近例、撰家以下人々存敬心之旨、各可沙汰云々、此事不受神慮也例、尤

不可然事也、号地口者土民事也、為之如何、頭人撰津掃部頭・飯尾左衛門大夫等為 室町殿御使罷向、執權卿公家中事可相触由被仰云々、予又可相触云々、可得其意由返答、但執權卿相催上者無益也、仍不触之、

十一日庚寅、晴、寒嵐入骨、放生会并御社參事馳走、為之如何、(之禮)伝聞、今夜鞍馬寺遷御云々、珍重、弥有憑、(之禮)十二日辛卯、(廣橋兼經)晴、御月忌也、

十四日癸巳、晴、參 御所、政始、官司仮屋間事也、任正長例、為修理職可致其沙汰由治定、(正長二年一〇月三日)十五日甲午、晴、今日八幡御社參也、云申沙汰云御共、微明、早參者也、委細有別記、

十七日丙申、晴、早旦參 御所、御社參無為御例、公武人々御釵進上之、予同之、昨日依例日也、今出河殿御參者也、関白殿同之、(礼力)依番參 内、宿直、(二条持通)廿日己亥、晴、入昼雨下、早旦參 御所、御服織手以下課役被懸之間事也、上意無御存知云々、奉行等沙汰也、以外曲事也、仍嚴密有御成敗者也、此外(駕輿)加与丁以下事同前云々、珍事仰法、公事違乱、為之如何、今日如例年蔭涼軒渡御、被書遊書銘者也、入晚細河讚岐宿所渡御、(成之)入夜帰參、依御修法也、還御以前申沙汰之、今朝伺定故也、

廿一日庚子、晴、廿七日渡御經榮之外無他事、貢馬二万疋分、今日少々、先出切符者也、

廿六日乙巳、

晴、御持僧參賀也、早旦參 室町殿、申次永繼朝臣、〔端裏書〕於御對面所御對面如年々、

廿七日丙午、

晴、雪聊飛、早旦參 御所、諸家・諸門參賀也、申次如昨日、其後安禪寺渡御如年々、御時以後此亭渡御、為御參 內・御院參也、即三獻御盃了、御直衣着御、委有別記、自当年可為如此云々、永享例也、公私祝着無極、萬代之嘉例不可過之、

入夜參 院、依貢馬伝 奏也、至今日惣用七万疋到来、五御馬預置者也、抑今日御引出物、白御釵・練貫御服三重・御馬等、也進上之、〔即〕廿九日戊申、

晴、早旦參 御所、歲末御例也、先御卷数、次御撫物等取重、持參 御所、着御之後取之退出、〔但御手入らる、許也〕入夜參 內・院、入夜自今出河殿美物三種拝領之、初度也、殊祝着畏存者也、〔即〕入夜參 申入者也、將又自 室町殿五種拝領如年々、繁阜祝着、年始之嘉瑞 畏申者也、同參仕所畏申也、

『網光公記』別記

十一月廿八日慈照院殿准后宣下事、十二月二日大智院御還俗事、〔足利義政〕

寬正五年

十一月

廿八日丁丑、

天晴、今日依吉日 室町殿〔從一位左大臣〕准三后 宣下也、兼日殿下被執申者也、〔二條持通〕

去年以來雖被申勸、有御斟酌之處、來月五日仙洞三席御會御參、為〔足利義滿〕

鹿苑院殿御嘉例、可有御拜任由、頗被申勸故也、尤以珍重、〔足利義教〕勝定院殿者、遂以御斟酌、至內府御昇進也、可謂沙汰外御事、普広院殿御儀者、

元來准后御座之間、無例、有御思案旨歟、於于今者、無予義御事也、宣下吉時已剋也、上卿按察中納言親長卿、〔甘露寺〕弁広光、奉行頭弁宣胤朝臣也、

每事被摸明德御例者也、其時上卿資広卿、〔裏松〕于時中納言、〔前資藤〕弁又當家也、奉行職事

頭弁也、〔兼室頼房〕彼是予計申沙汰者也、〔康〕陣儀事了、宣旨以下持參云々、春日局

被出逢、〔公卿座角間南面妻戸立几帳、〕頭弁束、就簾下、先 〔アキママ〕

次入沙金十両一裹於空宮返給、頭弁賜之、返給 〔アキママ〕 次又 〔アキママ〕

次又進 勅書宮、〔藏人中務丞種以量伝之、後福光園院例也、〕返給宮儀、如先、每事兼

日条々伺定、所申沙汰也、次武家面々進上御太刀、〔鹿苑院殿御例者、中務少輔兼敦卿也、〕進上御太刀、〔仍此間所、御直垂、〕次朔

日衆・公家人々并東面衆、各進上御釵、執權卿并予、〔アキママ〕禁裏・仙洞

勅言旨申入者也、〔高倉〕例式自 禁裏者御釵也、自 仙洞者御馬一疋・御釵

白也、次永繼朝臣〔直垂、〕取集大閣以下釵持參御前、如先々、次第人々參賀給、

法中又同之、各以 御台御方賀申入者也、千秋萬代之儀、尤靛情賞之通、

珍重、

十二月

二日辛巳、晴、

吉時可為未刻由、兼被仰下之間、奉行職事頭中將宗綱朝臣加下知了、上卿中院大納言、參木藤宰相卿、參陣、予着直垂、參今出河殿、兼顯、所召具也、是、宣旨等為勲申次也、頃之於会所有御還俗、前管領右京大夫勝元朝臣御裏頭之儀役之、着御白御直垂、御太口、次於南面妻緣間、被御覽位記并宣旨、其儀、兼顯於中門外取位記筥、大内記、持參御前、御披見之間、跪居、日野亞相被候御前、御覽了、取位記筥、從五位下、令置御前給、兼顯取空筥退出、於便宜所取沙金一裹、兩、入筥、經本路、返与内記、次又持參、宣旨筥、左馬頭、藤朝臣、其儀如先、次会所御出、管領以下、國衆御太刀、御馬進上之、先勝元朝臣御釵并御腰刀、折紙等進上之、即賜御釵、退出、近衆・外様以下至奉行、各御太刀進上也、御共衆ハ糸太刀也、其

外金云々、仍每朔公家輩同之也、日野亞相・三条相公御馬進上、同國持衆、次撰家以下一西面衆參賀、御太刀、各進上也、其例東面腰障子・三枚障子也、兼治定也、抑、室町殿・関白以下至撰家大臣被送申、其外者不殘、於今出河殿、聊御進退差別可候哉由、執權卿御談合云々、殿下等申合之處、誠以可宜か、撰家息并凡人大臣等可有御礼云々、仍各於簀子

令出逢給、三条入道内府等也、次日日野亞相為、仙洞御使參御前、御釵、御馬一疋被進由、申入、勅言之旨了、次予又參御前、御釵、持參之、禁裏、勅言旨申入、退出、直參、室町殿、人々已群參、武家面々御太刀進上程也、云御釵、云御馬、如今出河殿御礼、予、日野亞相令談合、鎌倉殿左兵衛督御昇進、聞書大外記師藤朝臣持參畢春日殿被出逢、被請取之、公卿座角間南面妻戸立几帳、兼顯就簾下進筥、即返給空筥、兼顯給之返

外記、其次御釵、御馬一疋、被下之、近代不沙金如此云々、抑此御昇進事者、就今出河殿御昇進如此、是又小河殿御例也、件度而殿御昇進也、公武人々御太刀進上之後、撰家、大内以下於御對面所被進御釵、

其儀如此間如此次今出河殿御參賀、自四足門御對面所座敷、御座、御釵、御腰刀、御馬一疋被進也、於御對面所直又被進御釵、御物即御退出、次御參御台御方、御參也、云々、每事無為、公私惣別珍重、殊相当申沙汰所祝着也、兼顯又初度申次所畏入也、人々同申入御台御方畢、春日局被出逢者也、抑今出河殿申次一色式部少輔・伊勢七郎衛門等也、一向武家儀也、宣旨取次事、小河殿御昇進之時、為星野左近將監云々、然兼日有沙汰、猶被用公家儀者也、凡今度時宜、連々御思案被巡上意、今及此御沙汰云々、鹿苑院殿御兄弟小河殿令相並給、御吉例云々、將又勝定院殿御代林光院殿相並御出仕之間、來年行幸等可有御供奉之由、被思食云々、尤殊勝、御名字義一視、前菅大納言勘進之、内々載勘文付日野大納言云々、即給御釵畢、小河殿為御例者、可為政御字歟、然上意猶可為義御字由、御治定者也、入夜景退出、補窮屈者也、

一、自禁裏・仙洞、各白御太刀、同被進、室町殿了、又自今出河殿禁裏御釵、仙洞御釵、御馬一疋被進之、於禁裏、予勲御使、於仙洞者執權卿之、

一、三寶院准后、室町殿・今出河殿御參賀也、其外法中雖參集退出、三个日以後可參賀云々、

五日、晴、早旦參、室町殿、今日聖護院准后以下多以參賀給、先被申今出河殿、其後參賀、室町殿、為御對面、更御出也、申次、永繼朝臣不參之間、時之申次上野民部大輔申次之、例式先東面衆法中申御礼了、

○次二万里小路時房ヨリノ書狀繼ガラルル
毛、宝徳二年六月ノモノナルニヨリ略ス、

○以下

○以下